

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	大山 美代
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) Representations of Aggression and Their Dynamics in D. H. Lawrence's Fiction			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)		教授	David M. Vallins
審査委員 (Name of the Committee Member)		教授	吉中 孝志
審査委員 (Name of the Committee Member)		教授	今林 修
審査委員 (Name of the Committee Member)		京都橋大学・教授	浅井 雅志
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文の主たる目的は、D・H・ロレンス (D. H. Lawrence, 1885-1930) が、知性によって抑圧されてきた「肉体的意識」を目覚めさせることによって、近代社会に縛られた自己を「再生」し、新たな人間関係の創造をめざした、人間の未来への洞察に満ちた作家であるということを示すことである。ロレンスは、「肉体的意識」をしばしば「動的意識」(‘dynamic consciousness’)と呼んでいるが、本論文では、「動的意識」の力によって、社会的差異により隔てられた他者との関係が動的に架橋され、停滞した古い人間関係が刷新されるという、ロレンスの作品を駆動するダイナミズムが、精緻な作品分析を通して論じられている。</p> <p>本論文は、序章と、4つの章からなる本論、そして結論によって構成されている。まず、‘Unrepresentable Experiences in the Early Works’ と題された第1章では、ロレンスの初期作品において、日常の意識から逸脱した瞬間的な身体感覚の目覚めが喚起する、肉体を通じた精神の「再生」が考察され、登場人物が、身体感覚に直接訴える情動やエピソードといった現象を体験することによって差別意識をはらんだ人間関係が動的に架橋されていることを指摘している。</p> <p>次いで筆者は、‘The Ambiguity of “Stillness” and Finding a Remedy in “Aggression”’ と題された第2章で、本論文の核となる概念である攻撃性や動的エネルギーの激しさと対をなす、「静」(‘stillness’)や「不活性」(‘inertia’)という概念に着目して、島を舞台としたロレンスの小説群や短編作品 ‘The Prussian Officer’ (1914) を検証しながら、これらの作品が、欲望や攻撃的本能を外に向けることの重要性を逆説的に示しているのではないかと、新たな解釈で読み解いている。</p> <p>‘Facing the “External” Others in the Late Works’ と題された第3章では、後期作品において、近代西洋文明の外部の価値観を未だ有する「外的他者」たちとの接触を通してイギリス人主人公が経験する、積極的な生命力のやりとりについて論じながら、ロレンスがポストコロニアリズムと社会的ダーウィニズムの文脈を超えて、多元的生命の共生への道を模索していたことを論じている。第4章 ‘Discovering the “Internal” Other and a New Vista on Human Relationship’ では、地理的な外部世界からイギリスへと視点を戻し、これまで外的他者の中に潜むとされ、恐怖を喚起してきた「暗黒の部分」(‘dark place’)が、実際には人間の肉体の内部に初めから存在していたもの、すなわち「内的他者」であったことを、ロレンスの思想から論証している。また、「動的意識」による交流持続の困難さという問題がこれまでの作品では未解決であったが、ロレンスは、<i>Lady Chatterley’s Lover</i> (1928) の中で「肉体の慈悲」(‘bowels of compassion’)という観念を提示することによって、男女の関係が瞬間的結合にとどまらず、永続していくための道を最後に導き出しているのではないかと論じた。そして結論として、ロレンスは人間の生命力の源である攻撃性の積極的価値を引き出すことに力を注ぎ、その動的エネルギーこそが、「他者」性を過剰に意識する近代社会における知性や精神の拘束を打ち破り、人間の未来を作り出していく力を持つことを説いたのであ</p>			

る、と主張している。

バタイユ、ラカン、ニーチェ等の思想や考え方を援用してロレンスを読み解こうとする姿勢は、時に偉大な思想家たちの不十分な理解に基づくものではないかと感じさせる点がないわけではないが、果敢で野心的な筆者の批評態度は、かなりの部分で成功しており、興味深い論文となっている。また、この分析に駆使された鮮明な英語表現も高い評価に値する。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)